
 書評

Peter Burke 『知識の社会史：知と情報はいかにして商品化したか』[A Social History of Knowledge: from Gutenberg to Diderot] 井山弘幸, 城戸淳共訳, 新曜社, 2004, 408p.

本書の著者ピーター・バークは、日本では『イタリア・ルネサンスの文化と社会』や『ヨーロッパの民衆文化』などで知られる英国の文化史家である。ルネサンスからフランス革命までのヨーロッパ近代を対象とし、ニューヒストリーやアーネル派、そして文化人類学的な方法を駆使した諸研究は、すでに現代の古典の位置を獲得している。その彼は近年その方法と対象をさらに拡げて、メディア史や情報文化史のマクロな歴史にも取り組んでいる。本書の原題は *A Social History of Knowledge: from Gutenberg to Diderot* (2000) となっていて、彼が研究対象としてきた近代前期のヨーロッパを知識や情報の観点から切り取ってみせた著作と言うことができる。姉妹編として、Asa Briggsとの共著で *A Social History of the Media: from Gutenberg to the Internet* (2002) (『メディアの社会史』未訳) があり、こちらはさらに現代にいたるまでのメディア史を扱っている。

『メディアの社会史』が、十分に深い洞察と広い背景的な知識に基づいているとはいえるソドックスなメディア史であるのに比べて、『知識の社会史』はもっと野心的な試みである。従来の研究枠組みの観点から言えば本書は、思想、科学、大学、産業、行政管理、教会、出版、図書館、読書等の歴史を独特の「情報・知識の管理」という視点から横断的に整理した著作と聞くことができるだろう。冒頭の「謝辞」に本書が過去40年間の研究に基づき「二次文献」をもとに書かれたものだと記してある。巻末の「参考文献」欄には約800点の文献がリストされていて、それを見るだけでも本書のパースペクティブの広さが明らかになる。

これまで、マックス・ウェーバーやデュルケム、マンハイムからレヴィ=ストロース、フーコーを経て、サイードやブルデューに至る研究者は、

知識が社会とどのような関係をもつのかをそれぞれの独自の視点で検討してきた。しかしながら、著者は一番研究が進んでいるヨーロッパ社会に限定しても、知識の社会史という研究領域がまったく空白になっていたという。(p. 22) それというのも、知識とは何かを定義することそのものがもつとも困難な問いの一つとされてきたからである。日本で紹介されてきた類似の試みとして、トム・マッカーサーが「レファレンス」を軸に、またB.C. ヴィックリーが「科学コミュニケーション」を軸に知識や情報にアプローチしている¹⁾。それらが知識のある局面から西欧文明全体を通史的に記述しているのに対して、本書は知識と社会との全体的な関係を「近代」という運動の歴史学的な枠組みにおいて述べているところに特徴がある。

それでは本文を見てみよう。1章から3章までは序論的な議論であり、本書で「知識」をどのように扱うのかをまとめている。著者は便宜的に「情報」を「生の」素材、特殊で実際的なものをさす場合に用い、「知識」を「調理された」素材、つまり思考によって処理されたり、体系化されたものをさすというように分離して定義した。(p. 24) これに基づき、ある時代において、政治家、技術者、実業家、一般の市民…等々の人々が行動の指針にしたり、判断の基準にするような「知識」がどのようにしてつくられ、配布され、また受け入れられていったのか、それをつくる側にまわる「知識人」がどのような人々であったのかに焦点をあてている。この定義によって、知識が扱いやすいものとなったことは確かである。またこの見方は、メディアの生成、配布、組織化、蓄積を主たる研究対象とする図書館情報学の視点と類似している。

本書の原著の副題に「ゲーテンベルクからディドロまで」とあるようにこの時代は、印刷メディアが普及する時期である。本書で扱われている「知識」は大学での講義や産業スパイがもたらす諜報情報のようなものまでさまざまな形態を取っているとはいえ、知識の担い手の中心は学者であり、その生産と配布のプロセスの中心には学者の相互の交流と知識をパッケージ化した出版物の流通があると著者は見なしている。これは、従来の印刷文化史に忠実な見方である。

そして図書館情報学的な命題として見過ごすことが出来ない重要な指摘として、この時期の学者が自分たちのことを「書物の共和国」(Respublica literaria)に所属しているという意識を強くもっていたということがある。(p. 51, 91, 255) この言葉は、知識人が書物を通して公表される知識の共同体に属していたことを意味する。新聞や雑誌を通じてのジャーナリズムが現れる以前のこの時代には、知識が体系的にまとめられるための重要なメディアとして、書物の出版が重視されていた。そして、これを媒介する存在としての図書館や実際に媒介する司書、そして知識そのものを再組織化するためのツールである参考図書（百科事典や専門辞典、書誌など）の役割も重要であったとされている。

4章以下では、それらが知識の地理学（4章）、知識の分類（5章）、知識の管理（6章）、知識の市場化（7章）、そして知識の獲得（読者の役割）（8章）、知識への懷疑（9章）にわたって論述されている。とくに図書館情報学に関係の深い部分を紹介しておこう。

書物の共和国において、異なる地域に住む学者同士を仲介し、知の組織化を試みようとする「知識管理者」たる人々がいた。本書で何度も名前が出てくるフランシス・ベーコン、コルベール、ライプニッツ、ノーデ、ディドロ、オルデンバーグなどの人々であるが、これらの人々のなかには、学者兼司書であった人（ライプニッツ、ノーデ）、図書分類法に大きな影響を与えた人（ベーコン）、百科事典の編集を通じて知識組織化に影響を与えた人（ディドロ）などこの分野と切っても切れない関係をもつ人物が含まれている。16世紀から18世紀にかけて、司書は書物の共和国のなかの重要な媒介者と見なされるようになった。(p. 48) また図書館そのものが、「知識の府」としての役割を果たし、都市には公開された図書館が備えられ、遠くからの利用者を引きつけときに学識者の社交の場であるとともに情報や思想の交換の場ともなった。17世紀半ばのイギリスでベーコン主義に基づく学問の改革において図書館の改革が含まれ、司書は「普遍的学問の進歩を担う中心人物」とされたという。(p. 89)

図書館は印刷物の閲覧を行う場として、書物の

形をした知識を組織化することを担っていた。知識を組織化するための考え方としては、アーノルド・フリード、デイビッド・カリキュラム、アーヴィング・カーリング、規律、走路などのメタファーが用いられてきたが、これが図書館資料を配置するための分類体系に取り込まれたことで、図書館はフーコーの言う「知の考古学」における発掘の場として最適の条件を備えることになる。つまり、古い図書館ではその時々の蔵書の配列が当該時代の知の組織原理を示すことになるからである。また、図書館は分類法以外の知の組織法の工夫を進める場でもあった。ゲスナーの世界書誌（ただし本書では正式書名は記されていない）がよき先例であることはよく知られている。(p. 159)

以上のように、本書は近代初期に「書物の共和国」が成立し、図書館と司書および分類、目録や書誌の作成のような関連する知の組織化の技術がそれを支える重要な役割を果たしていたことを論証している。私たちには図書館の組織原理およびライブラリアンシップをたかだか19世紀以降の英米の発展だけをみて議論する傾向があるが、本書は、さらに遡って近代ヨーロッパ全体の動きを考察しなければ、図書館情報学が対象としているものの本質は理解できないことを示唆している。その点で、この領域に关心をもつ人に必読の著作である。

本書の訳はたいへん読みやすい。その点で訳者の多大な労に感謝したい。また、このような多方面の話題を扱う著作で欠かせない索引がよくできていることも評価できる。ただ一点、7章で市場化について扱っているとはいえ、本書は全体としてこの時期の知の公共性の全体像を描き出すことに主眼が置かれているので、日本語訳の副題が「知と情報はいかにして商品化したか」とあるのには、本書の課題を先読みしすぎているのではないかと違和感を覚えた。

- 1) McArthur, Thomas Burns 『辞書の世界史：粘土板からコンピュータまで』 [Worlds of Reference] 光岡明洋訳、三省堂、1991、349 p.; Vickery, Brian Campbell 『歴史のなかの科学コミュニケーション』 [Scientific Communication in History] 村主朋英訳、勁草書房、2002、268 p.

【根本彰、東京大学大学院教育学研究科、2005年10月10日受理】